
IV | 特集 | コロナ禍の中のミニシアター・上映者

全国コミュニティシネマ会議2021

“持続可能な”映画館/コミュニティシネマ

2022年1月に日本映画製作者連盟が発表した興行データによると、2021年の興行収入は約1600億円で前年を13%上回ったが、興行が非常に好調だったコロナ前の2019年の60%までしか回復しておらず、多くのミニシアターが2019年比30~40%減という厳しい状況で運営を続けている。

コロナが始まって2年間。この厳しい状況の中でも新しい映画館が生まれ、多くの映画館やコミュニティシネマがこの状況に対応するために、あるいはこの状況を逆手に取って新しい試みに挑戦している。

文化庁の令和2(2020)年度第3次補正予算事業として2021年5月に始まった「ARTS for the future! コロナ禍を乗り越えるための文化芸術活動の充実支援事業(AFF)」が、全国各地の映画館やコミュニティシネマの様々なチャレンジを後押しした面もあった。コミュニティシネマセンターが2021年1月に立ち上げた全国のミニシアターやシネマテーク、自主上映団体等の上映関連のイベント情報を提供するウェブサイト「Arthouse Press(アートハウスプレス)」(arthousepress.jp)のEVENTSのアーカイブでも、毎週末、非常に多くの特集やイベントが実施されたことを見とることができる。

2021年度の全国コミュニティシネマ会議は、コロナ禍の影響が続く中、当初予定していた盛岡市での開催が中止となり、昨年同様、東京で開催することとなった。

IV | [特集] コロナ禍の中のミニシアター・上映者

プレゼンテーション

コロナ禍の中で、始めました。



(上から) jig theater 外観、受付、上映空間の様子

jig theater (ジグシアター) (鳥取県湯梨浜町) | 柴田修兵、三宅優子

2021年7月、『逃げた女』（ホン・サンス監督）でこけら落とし。

私たちは鳥取県から来ました。鳥取県は人口55万人、日本で一番人口が少ないことで有名ですが、住んでみると意外とちょうどいいような気もする、とても面白いところです。

そんな鳥取県の湯梨浜町(人口約1.6万人)にジグシアターがあります。県内には他に映画館が3つありますが、アートハウス系の映画を上映しているのは私たちだけなので、県内外からお客さんが来ています。ジグシアターがある松崎地区には、JRの小さい駅があって、そこからジグシアターまでは徒歩15分ぐらいです。道の途中に、雰囲気の良いカフェや、面白い本屋、ユニークなゲストハウス等が立ち並び、小さいながらも活気のある町です。

ジグシアターは、湖が広がる美しい風景を見下ろす小高い丘の上にあります。丘の上にはぽつんとある白い建物、ここは十年ほど前までは小学校として使われていました。いまは町が管理をしてクリエイター向けに賃貸をしています。この3階にジグシアターがあります。

2021年2月に私たちは大阪から鳥取に移住しました。どちらかの実家があるわけではなく、ここが気に入って移住しました。大阪時代に、柴田が濱口竜介監督のワークショップに参加し、『ハッピーアワー』に出演したこともあり、移住してすぐに実施したプレオープニングイベントでは『ハッピーアワー』の上映と濱口監督のオンライントークを行いました。それから少しの準備期間を経て、7月にこけら落としとしてホン・サンス監督の『逃げた女』を上映、その後、8-9月にはケリー・ライカート特集、10月には隣町の映画館「倉吉パープルタウン シネマエポック」で出張上映をして、11月はフレデリック・ワイズマンの『ボストン市庁舎』、12月には「現代アートハウス入門」に参加させていただき、年末から濱口監督の『偶然と想像』を上映。すばらしい映画を上映しながら一年目が終わったところです。

私たちは、まさに「コロナ禍の中で、始めました。」なのですが、もともと鳥取県は人口が非常に少ないため、それほど大きな影響を感じることはありませんでした。

人口が少ない町で映画館を続けていくために、いくつか考えていることがあります。まずは「適度なスペース」。ジグシアターは80平米で1スクリーン、35席です。ゆったりした空間で映画を鑑賞できて、ひとりでもオペレーションできるようにしています。町営で地方ということもあり、非常に安価な家賃で借りることができています。次に「適度な上映機材」。価格を抑えた製品を選びつつ、できるだけよい上映環境を保つことを心がけました。

それに「適度な上映本数」。ジグシアターでは月に1企画程度に絞って上映をしていて、日数にすると1ヶ月7日間ほどになります。人口規模を考えると、毎日何本も上映するより、「これぞ」という作品だけを上映した方が、お客さんが迷いなく足を運ぶことができ、無理のないペースだと感じています。その分、できる限り丁寧な宣伝を心がけています。監督にしても作品にしても、「初めて出会う」という人がほとんどなので、自分たちの言葉で詳しく伝えるようにしています。SNSはもちろん、チラシを鳥取のあちこちのお店に

手配りすることで口コミを広げています。

最後に、ジグシアターは「戸惑いの映画」をコンセプトに上映しています。戸惑いというのは、いままで気づかなかった自分の中の何かが揺れることだと思っています。見慣れたはずの景色や、当たり前になっていた人との関係、自分の言葉などがふわふわと揺れていく。そうした戸惑いは、誰かと喋りたくなるようなものだと思います。月に1企画しか上映しない分、町内の視聴率はすごく高く、見終わった後にジグシアターの受付で話をしたり、周辺のカフェや書店でジグで見た映画の話をしたり、初対面であっても映画の話題で仲良くなったり、身近な友人でもその人の別の側面を知ることができたり、出会い直しの機会になっています。

配信でいくらでも映画を見られる時代になりましたが、リアルな映画館に足を運ぶ楽しみがちゃんとあるのがいいと思っています。

ジョージア映画祭2022 | はらだたけひで

2022年1月29日、岩波ホールにて開幕!

私は3年前まで長く「岩波ホール」で働いていました。私とジョージア映画との関わりは、1978年秋に担当したジョージア(グルジア)映画『ピロスmani』(1969/ゲオルギ・シェンゲラヤ監督)が最初になります。ジョージアの映画と文化に魅せられた私は、それ以降、ジョージア映画18作品の公開を担当し、2018年には「第1回ジョージア映画祭」を岩波ホールで開催しました。その後、岩波ホールを退職しましたが、私の中では、まだジョージア映画の魅力をもっと日本のお客にお伝えする仕事をやり残しているという思いがありました。

ジョージア映画は、ソ連時代の70年間にドラマ、ドキュメンタリー、アニメーションを合わせると約3000本作られたといわれています。しかし1991年のソ連解体後も多くのネガがロシアに保管されたままで、また独立後の混乱の中でポジプリントのほとんどが傷つき、2018年のジョージア映画祭の時点では作品の選択肢が極めて限られていました。しかし、この数年で作品の修復が進み、わずかですが返還も行われ、私も何度かジョージアに行って映画人と交流する中で、ようやくジョージア映画の全貌がわかってきました。そこで前回の映画祭からさらに一歩踏み込み、ジョージア映画を歴史的に俯瞰するという今回の映画祭を実現させることが、私の責務だと考えるようになりました。

この2~3年、コロナの影響で現地を訪れることができなくなりましたが、字幕を担当していただいたトビリシ在住の言語学者の児島康宏さんと、DCPを個人で制作してくださった大谷和之さんと連絡を取り合いながら映画祭の準備を進めてまいりました。

1月29日に始まった「ジョージア映画祭2022」では、長短篇あわせて34作品を上映します。このうちソ連時代に製作された約30作品は、2019年時点でジョージアが所有する上映可能なソ連時代の映画のほぼ全てになります。

ジョージア映画には欧米の映画とは一線を画した独特の魅力があります。近作『葡萄酒に帰ろう』を撮った巨匠エルダル・シェンゲラヤ監督は、「ジョージア映画はジョージア人のためのもの」と言います。リュミエール兄弟によってパリで初の映画上映が行われた翌年1896年にジョージアで映画が初めて上映され、当時の優れたジョージアの芸術家たちは、この新しい技術に大に関心を持ちました。1921年にボルシェヴィキの侵攻を受けてソビエト連邦の傘下に組み込まれ、1930年以降のスターリン時代には厳しい政治的抑圧、検閲で表現が制約されることとなりますが、ジョージアの映画人はその体制に抗い、独特の民族的精神、文化、そして自由への思いを、巧みに映画の中に潜ませました。そして監督それぞれが個性的で独自の人生観、世界観を持っているので、厳しい社会状況にもかかわらず、多様で豊かな内容の作品が次々と誕生してゆきました。



ジョージア映画祭2022 チラシ

ジョージアは地政学的にも東西交易の要になる地域にあり、3000年の歴史の中で侵略と占領の憂き目に会ってきました。平穏だった時期はごくわずかであり、多くが戦争の日々でした。その中で滅亡の危機から蘇ることができたのは、彼らに独自の文化があったからだと思います。宗教・言語・文字、ワイン、ポリフォニーといった独自の文化を守ることが、民族存続の礎だったのだと思います。20世紀に入って映画がその中に加わりました。

この映画祭の直前に、岩波ホールの閉館が突然発表されました。非常にやるせなく、怒りもいまだに抑えきれませんが、同時に、ジョージア映画祭が岩波ホールの「エキブ・ド・シネマ」の活動の延長でもあることに気づき、開催意義とその責任も感じるようになりました。現在、映画だけではなく、文化はますます厳しい状況に追い込まれているように思います。しかし人間が人間であるために文化は最も大切なものです。ジョージアの歴史を見ても、文化こそが人々の命綱でもありました。その文化を守り、発展させるためにも、いまこそ新旧の作品にこだわらずに、多様な上映活動が必要なのだと考えています。



シネマネコ外観(上)、ロビー(下)

シネマネコ (東京都青梅市) | 菊池康弘

2021年6月、50年ぶりに青梅に映画館開館。

全国コミュニティシネマ会議が2019年に埼玉で開催されたときに初めて参加しました。突然「映画館をつくりたい」という私に、皆さん温かく接してくださり、全国のミニシアターの支配人や上映関係者の方々に貴重なご指導をいただきました。そして、2021年6月、青梅市に「シネマネコ」をオープンすることができました。この場を借りてお礼を申し上げます。

私は20代の頃、10年ほど役者として活動していましたが、30才で地元の青梅に戻って飲食店を始め、青梅市で4店舗の飲食店を経営してきました。青梅には50年前までは3つの映画館があり、現在も「映画看板の町」として商店街を盛り上げています。けれど、映画館は1館も無くなっていました。飲食店でお客さんが「また青梅で映画が見たい」「映画館看板はあるのに映画館がないのは寂しい」と話すのを聞いて、地元の人が映画館を求めているのに、なぜ青梅には映画館が無いのか、どうにかできないのかと感じ、映画館を復活させたい、エンターテインメントの力で地元を盛り上げたいと思うようになりました。

青梅はもともと織物の街で、かつては養蚕が盛んで、現在もいたるところに織物工場跡が残っています。青梅織物工業協同組合の敷地内に「旧都立繊維試験場」という国の登録有形文化財にもなっている木造建築があります。この建物をリノベーションして映画館にすることで、青梅が織物の街であることをPRできるのではないかと。また、青梅で養蚕が盛んだ頃には猫がたくさんいたようで神社にも猫が祀られていて、商店街では「猫の街」として猫のお祭りなどもやっているので、映画館の名前を「シネマネコ」にして、市内にある猫の映画看板をうまくデザインしたキャラクターを作れば商店街ともコラボできるのでは…とアイデアが次々に浮かんできました。

「旧都立繊維試験場」を映画館にしよう決めましたが、国の登録有形文化財である木造建築を消防法や建築基準法などをクリアしてリノベーションするのは、かなりハードルが高いことがわかり、いろんな映画館を見に行きました。埼玉の「深谷シネマ」は築100年の木造の酒蔵を改築した映画館で、工事内容などを参考にさせていただきました。「旧都立繊維試験場」は昭和10年頃に建てられた建物で、築年数でいえば約80年、リノベーション工事では基礎部分をコンクリートで固めて耐震補強し、防火・防音の処理もしたので、普通に建設するよりも建設費がかかってしまいました。

内部は最先端の設備を整えています。上映素材はDCP、ドルビーサラウンド360のサラウンドやサウンドスクリーンを搭載、座席は新潟県にあった「十日町シネマパラダイス」から譲り受けたキネット社の椅子です。国の登録有形文化財と最新の音響設備の融合を実現することができ、「文化的な価値をリデザイン

し、新たなコミュニティを作り地域活性化を目指す」というシネマネコのコンセプトにかなう場所をつくることができ、2021年のグッドデザイン賞にも選ばれました。

総工費は約1億円。全体費用の3分の2まで計上できる「商店街活性化・観光消費創出事業」という経済産業省の補助金を活用して約5000万円を確保、クラウドファンディングで約550万円を集め、地元の企業から約300万円を協賛していただき、残りは自己資金で賄いました。

2021年6月4日にオープンして7ヶ月、1ヶ月の集客数の平均は1000人弱ぐらいです。緊急事態宣言下での開館となり、その後も緊急事態宣言やまん延防止等特別措置が繰り返し発出されたことを思うと、多くのお客様にご来場いただいているかなと思います。来場者数の目標は1年間1万人です。映画館の会員数は間もなく600人になります。こちらは年間1000人を目指しています。

シネマネコは地元の東栄会商店街の会員なのでシールラリーに参加したり、地元のパン屋と協力してカフェのメニューを開発したり、酒蔵とコラボレーションしてお酒にまつわる映画を上映したり、商店街のアートフェスティバルで無料の上映会をやったり、地域と連携したイベントにも力を入れています。

シネマネコが目指しているのは、文化財を活用して、地域に根差した映画館を創り上げ、コミュニティ形成もできる、地域の人たちが大切にしたいと思える場所、ほっとできるような居心地のいい場所、サードプレイスとなることです。

コロナ禍の船出となりましたが、コロナ禍で「映画の力」をいままで以上に強く感じています。

小野沢シネマ（島根県益田市） | 和田浩章

2022年1月、益田市で映画館「小野沢シネマ」を14年ぶりに再開。

僕は、東京・田端にあるユニバーサルシアター「シネマ・チュプキ・タバタ」で支配人として働いていました。今年(2022年)1月、コロナ禍に過疎という言葉が生まれた島根県益田市に映画館「小野沢シネマ」を再建しました。

益田市は人口約4.5万人で人口減少が進んでいます。私のパートナーの更沙は益田市の出身で、東京で暮らしながらずっと島根のことを気にかけていました。僕と彼女は明治大学で行われた「バリアフリー映画祭」で出会ったのですが、その後、「未来の映画館を作るワークショップ」で再会し、彼女から「島根に映画をきっかけに人が繋がることのできるようなカフェのようなミニシアターを作りたい」という話を聞きました。僕は2016年に開館した「シネマ・チュプキ・タバタ」の支配人になり、2017年には彼女と結婚しましたが、ふたりで映画館をやることは考えていませんでした。そんな折、シネマ・チュプキで、益田で永年映画館をやってきた興行会社の創業者の孫・神田聖らさんと偶然に会い、この方のおじいさんがつくられた映画館「小野沢シネマ」が2008年に閉館して、映画館がそのまま残っているという話を聞きました。「映画文化をなんとか益田に取り戻したい。そのためにできることは協力する」と言ってくださいました。その後、帰省したときに映画館を見せていただいたところ、営業当時のままのきれいな状態で、スクリーン・スピーカー・座席・カーテンが残されていました。興行会社の三代目にあたる小野澤勝明さんにもお会いして当時のお話を聞かせていただくこともできました。益田市は島根県の西端にあり、映画館のある出雲まで車で2~3時間もかかります。小野沢シネマが閉館してからは、益田の人が映画を見るには東京から富士山まで行くぐらいの気持ちで行かねばならない状況になっていました。

2020年に僕は体調を崩してシネマ・チュプキを退職しました。その頃、とある企業から茨城県でミニシアターの支配人をやらないかというお話をいただいたのですが、よく聞いてみると映画館作りに対する価値観や気持ちが全然違うことがわかってうまくいきませんでした。かなり落胆しましたが、そのとき、益田の閉じたままになっている映画館のことを思い出したんです。あの映画館を再建できないかと。



小野沢シネマ 受付にて

2021年、二番目の子どもを益田で里帰り出産することを考えたときに、小野沢シネマの再建に向けて本格的に動き出すことを決めました。よい状態で残されているとはいえ、映写室や電気設備は新たに設けなければならない、最新の上映機材(DLP)を導入して、古くなった空調・換気設備も新調するとなると、かなりの費用がかかります。その一部をクラウドファンディングで支援していただくことが、夏にクラウドファンディングを開始し、約3ヶ月で目標額の600万円を超えるご支援をいただくことができ、再開の目処が立ちました。ロビーの壁画は私たちが大好きなアーティスト清水美紅さんに描いていただいたのですが、この中にご支援くださった方々の名前が描かれています。14年も使われていなかった映画館ですから見えないところにはずいぶん汚れも溜まっていました。妻とふたりで徹底的に掃除をして、超高速で開館の準備を進め、その様子をSNSで発信しました。

2022年1月26日になんとか開館に漕ぎつけることができました。ここに至るまでには本当にいろんな方々が応援してくださいました。シネマ・チュブキの平塚さんにも助けていただきました。14年間も映画が無かった町ですから、地域の人に理解してもらい、応援してもらえるようになるまでには時間もかかります。落ち込むことも少なくありませんでした。そんなときに、鳥根県在住の脚本家の渡辺あやさん(『ジョゼと虎と魚たち』)からご寄付いただいたり、奇跡のようなことが起こって勇気づけられながら続けてきています。昨年末からまたコロナの感染が拡大して、まん防措置の中での再開で厳しい状況ですが、僕はやはり映画から離れることはできないと実感しています。映画館の支配人として、映画を選び上映する中で様々な出会いがありました。先が見えないコロナ禍でも、胸をいっぱいにして夢を描ける時間を提供したい、誰かにとっての希望の灯火を届けたいです。映画館が町にあることがすごく重要だと思いますし、映画のポスターが入れ替えられるだけでも町に彩りを添えられるような気がしています。現実には厳しいですが、営業を続けられるよう、今後も努力を惜しまず映画を愛しつづけます。



宮崎キネマ館 ロビー(上)、キネマ2(下)

宮崎キネマ館 (宮崎県宮崎市) | 喜田惇郎

2021年春、移転リニューアルオープン。

「宮崎キネマ館」は2021年の春に移転リニューアルオープンしました。宮崎キネマ館は、宮崎県唯一のミニシアターで2001年にNPOが運営する全国初の映画館として開館し、宮崎市の中心市街地の商業ビル2階の93席と55席の2スクリーンで、2020年2月14日まで20年ほど営業してきました。このビルは天井が低くスクリーンのサイズが取れないのが大きなネックで、年々ホームシアターが充実する中、映画館としてできるだけ大きなスクリーンで上映したいという思いが募っていました。また、専用の駐車場がないのも大問題で、お客様からのクレームのほとんどが駐車場にまつわることでした。さらにフロアごとに一括管理の空調だったので映画館の中は冷えやすく、映画館にとっての適温では他のテナントは暑いという問題もあり、そんな諸々の悩みを解決できる場所に移転したいと考えていましたが、なかなか実現できずにいました。

宮崎県には現在も全国チェーンのシネコンはありません。宮崎市内に地元の企業が運営するシネコン「ワンダーアティックシネマ」と「セントラルシネマ」、ミニシアターの宮崎キネマ館の3館があり、都城市に「都城シネポート」、延岡市に「延岡シネマ」があり、宮崎県全体でも映画館は5館です。かつては1スクリーン当りの人口が6万人を越える、全国でも最も映画館が少ない県のひとつだったのですが、2020年秋に宮崎駅前の大規模商業ビル「アミューブラザ」内に7スクリーンの「ワンダーアティックシネマ」がオープン、2021年春には宮崎キネマ館が移転リニューアルして4スクリーンとなり、ようやく全国水準に近づいてきました。先に挙げた様々な問題とともに、キネマ館から徒歩5分ほどの駅前にシネコン「ワンダーアティックシネマ」

が開館することが決まったこともあって、移転リニューアルを決断するに至りました。これまでは、他県ではシネコンで上映される作品も宮崎では宮崎キネマ館が上映することが少なくありませんでしたが、新しいシネコンができればなくなるかもしれない。それに、ワンダーアティックシネマは「大人向けの作品」も積極的に上映するとアナウンスしていて、これまで宮崎キネマ館の経営を支えていた「大人向け」の良質な作品も取られてしまうのではないかと危機感に襲われました。代表や他のスタッフとも相談を重ね、同じところで同じやり方を続けていくよりは、思い切って挑戦してみようと移転を決めました。

移転先は駅前から伸びる大通りに面した商業オフィスビルの平面駐車場の中のテナントで、以前はブティックやハンバーグ屋が入っていました。ここなら天井は高くなるし、駐車場の心配もなく、空調も単独で管理できます。宮崎キネマ館を立ち上げた20年前と比べると観客の好みが多様化、細分化し、公開本数も増えているので、コンパクトでもスクリーンを増やしたほうが良いと考え、既存の建物に3スクリーン(38席/20席/16席)を設け、隣接した場所に比較的大きな100席の劇場を新築、計4スクリーンの映画館とすることにしました。小さい劇場ではありますが、宮崎らしい個性をもたせたいと内装には県産材の木材を使い、新築の劇場は木造建築にしました。内装の木材は照明の灯りを柔らかく反射し、「木の香りが漂うおだやかな空間ですね」とお客さんからの反応も上々です。

移転に際しては約8000万円の費用がかかりました。ほとんどは銀行からの借入れで賄いましたが、クラウドファンディングを実施して624万9000円を集め、寄付も合わせると900万円を越えるご支援をいただきました。本日この会議に参加されている方々の中にもご支援くださった方がいらっしゃると思います。この場を借りて改めて御礼申し上げます。ありがとうございました。

2021年3月、コロナ禍の真っ只中で明るいニュースが少ない中での移転リニューアルオープンだったので地元のマスコミはこぞ取り上げてくれました。おかげで好調に滑り出すことができ、月を追うごとにお客さんも増えてきました。コロナの感染拡大の波に合わせてお客さんが引いていく状況ではありますが、現在のところ想定した目標額を上回る売り上げを上げていくことができます。それでも建物が大きくなった分、固定経費も倍近くになり、お客さんが減ってしまうとすぐに足元がおぼつかなくなる怖さも感じています。九州にお越しの際には宮崎まで足を伸ばして是非とも宮崎キネマ館にお立ち寄りください。

ほとり座(富山県富山市・高岡市) | 田辺和寛

2020年6月、新館「ほとり座」開館。

富山市にある「ほとり座」は2016年11月に20席の小さなミニシアターとして産声を上げました。コロナ禍の序盤の2020年3月末までそこで営業していて、4月に「フォルツァ絵曲輪」跡に新館を開館する予定で準備をしていましたが、感染拡大の影響で約2ヶ月延期して、2020年6月20日に新館「ほとり座」がオープンしました。

当初はコロナ禍の影響で観客が一桁台ということが続き不安になりましたが、開館から2ヶ月後に動員数が1000人を超え始め、同年11月には『はりぼて』の大ヒットがあって少し勢いに乗れました。『はりぼて』は8月に全国公開しましたが、富山はまさに「ご当地」で、選挙があったり、顔と実名が出ていることなどを考慮して11月公開として、2000人を超える大ヒットになりました。

新館開館後は、通常の上映に加えて「夕方子どもシネマ倶楽部」や「音楽ライブ」「ワークショップ」などのイベントを定期的に行っています。新たな取り組みとして、お隣の石川県金沢市にある「シネモンド」と共同で企画し、「ミニシアター・パーク」の井浦新さんや渡辺真起子さんに参加していただいてアニメーション映画『ウルフ・ウォーカー』の吹き替えを体験するワークショップ「子ども映画教室」も開催しました。

ほとり座には「シネマホール」と「ライブホール」というふたつの劇場があります。古い劇場なのでスクリーン



夕方子どもシネマ倶楽部

の前のステージが広いという特性を活かし、スクリーンを有効に使ってちょっとしたレイトショーのような空気で音楽ライブもやっています。施設は映画上映以外の貸会場としても活用しています。

2018年に法人化(株式会社EVERT)したことで事業の幅が広がり、映画館運営以外の事業を手掛けるようになりました。商業スペースをプロデュースした経験のあるスタッフがいたので「SOGAWA BASE」という同じアーケード内にある商業施設の1階部分をプロデュースしたり、映像コンテンツ制作ではほり座をロケ地として使ったりもしています。また、「まちづくり」に関する事業や行政との連携、以前から取り組んでいる「大型ホール」(オーバードホール、新川文化ホール等)とのコラボなど、様々な可能性に挑戦しています。あくまでも文化を軸にした事業ですが、映画館の運営だけだとちょっと苦しい月もあり、いろいろな仕事を手がけることでコロナ禍においても会社全体としては「正常運転」の状態を保つことができています。映画館を運営しているという社会的な印象、役割、運営する責任はとても大きいと感じているので、今後こつこつと質を高めながら微速前進していこうと思います。



ダフレンズ1階シネマ

2020年7月、高岡市に「DaFriends×HOTORIZA」オープン

「ほり座」とは別に、2020年7月中旬には富山県第二の都市、高岡市に「DaFriends×HOTORIZA」(ダフレンズ)をスタートしました。ここは「シネマカフェ」的な場所で、商業ビルの運営会社が出資を出して、高岡のまちの賑わいの創出とビルの再建を兼ねて、「映画×飲食」というコンセプトで何かやりたいということで、ほり座が総合プロデュース(コンサル)する施設としてオープンすることになりました。

1Fは「旧ほり座」の雰囲気と融合させた30席ほどの小さな映画館、2Fにはカフェバーがあります。具体的には、ほり座は「映写や音響の調整」「毎月の映画選定」「ブッキング」「マンスリーガイド作成」などの業務を担当しています。店舗の運営は「ダフレンズ」、中身は「ほり座」というコラボ型の映画館として運営していて、映画館存続のためのモデルケースになるのではないかと感じています。

しかし、いずれにしても現状は厳しいところがあります。富山市の人口は約41万3000人で、ほり座は月平均1500人の集客を経営ノルマとして設定していますが、現状は1212人で少し赤字です。将来的には1ヶ月2000人、年間1万2000人を目指したいと思っています。映画館だけでは難しくても、イベントや出張上映など様々なオプションを持っているので2000人は可能な数字です。高岡市の人口は約16万8000人で、ダフレンズの月平均ノルマは350人程度に設定していますが、かなり苦戦していて現在は月204人です。過疎地域の再興を含めた映画事業ということになるので、目標を達成するには最低でも三年ぐらいはかかるのではないかと感じています。

ほり座もダフレンズも、仮にコロナ禍が終わったとしても、コロナ前には戻らないと予測されることに加え、配信の時代となった現代において「映画館で見る意味」を真剣に考え、体現しながら宣伝やコミュニティの質を向上させる必要があると考えます。

私は、映画上映にはまだまだ可能性があるかと確信しています。12月に「boid」の樋口泰人さんとコラボした「boid sound映画祭」には多くのお客さんに来ていただきました。映画の魅力に加え、音に徹底的にこだわった特別な体験を提供する、飲み物や接客なども含めて良質な映画体験を提供するための空間づくり、時間づくりに注力することで、配信の時代でも映画館に行く価値を見出せる、暮らしを豊かにする映画体験を提供できるんじゃないかと思っています。

上田映劇(長野県上田市) | 原悟

2020年、「週末こども映画館」「うえだこどもシネマクラブ」「トラウム・ライゼ」スタート!

長野県上田市は人口約15万人です。「上田映劇」は、大正6年(1917)に「上田劇場」として創業、当初

は大衆演劇の芝居小屋でしたが後に映画興行を中心とする劇場となりました。上田市には最盛期には6館の映画館がありました。平成に入る頃には「上田映劇」と「上田でんき館」の2館となり、2011年に「TOHOシネマズ上田」(8スクリーン)がオープンすると、映画館のデジタル化の波も相まってこの2館も閉館してしまいました。その後、2016年にこの歴史ある映画館の保存と再生を考えるための上田映劇再起動準備会がつくられました。創業から100周年となる2017年に定期上映を再開、2018年にNPO法人上田映劇を設立して映画館としての運営を続け、今年の4月15日再開5周年を迎えます。

上田映劇はとても歴史のある建物で、私たちの最大の目的はこの劇場を残していくということにあります。1スクリーンで1階189席、2階81席、DCP対応のDLPの導入ができていないためブルーレイと35ミリフィルムで上映しています。もともと芝居小屋として建てられた上田映劇はステージが広く、お芝居やライブ、落語、寄席、講演会などにも使うことができます。積極的に貸館もしていて、貸館収入が最大の収益源となっています。

長野県内には映画館が多く、同じ作品を複数の映画館で上映することもよくあるので「上田映劇で見た」と思ってもらえるようにいろいろな工夫をしています。中でも「映劇手帖」と「映劇はんこ」はとても好評です。映劇はんこは作品のメインカットを彫った消しゴムはんこで、鑑賞ごとに映劇手帖に映劇はんこを押印します。映劇はんこは他の映画館に貸し出すこともあります。

きょうのテーマ「コロナ禍の中で、始めました。」についてお話させていただきます。上田映劇は再開した翌年2019年10月に台風19号の被害を受け、2020年1月には空調設備が全て壊れるという事態に見舞われました。2月頃にはコロナが深刻な状況となり、4月には閉館を余儀なくされる、と大きな打撃を受け続けました。そんな厳しい状況でしたが、この2年間、いろいろなことにトライしてきました。まず、2020年3月に「週末こども映画館」を開始、4月の休館中にはオリジナルグッズの販売を始め、6月に営業を再開した後、7月には2011年に閉館した旧「でんき館」を「トラウム・ライゼ」として再開、8月には「うえだこどもシネマクラブ」という取組を始めました。

「トラウム・ライゼ」は上田映劇から100メートルほどの場所にあります。2011年にでんき館が閉館してそのままになっていた劇場を、上田映劇が使えないときにお借りしていたのですが、2020年7月からは常設館として使っています。上田映劇と合わせて2館2スクリーン体制となって、より多様な作品を上映することができるようになりました。ここにはスクリーンが2つありますが、現在は82席の小さい方だけを再生して使っています。

上田映劇では子ども向けの企画に力を入れています。2020年3月に始めた「週末こども映画館」は、幼児～中学生向けの週末限定の上映プログラムです。ミニシアターには子どもやファミリーで鑑賞できる作品が少なく、シネコンでも定期的に作品があるわけではないので、子どもたちは日常的に映画体験を得ることができていません。そこで映画館と子どもたちとの日常的な接点をつくらうとこの企画を始めました。映画を通して親子の対話を促すことにもつながると考えています。このプログラムのもうひとつの目的として、将来的にこの場所を担っていく若者を育てたいという狙いもあります。鑑賞料金は、高校生以下は500円、子ども同伴の大人は1200円とかなり低く設定しています。教育委員会に協力していただいで市内の全小中学校でチラシを配布しているので、だんだん企画が定着してきたように感じます。最近では普通の上映よりも多くのお客さんがくることも少なくありません。

「うえだこどもシネマクラブ」は、学校に行きにくい・行かない子どもたちの新たな「居場所」として映画館を活用する取り組みです。NPOの中間支援を行うNPO「アイダオ」と若者の自立支援を行うNPO「侍学園」、そして「上田映劇」、3つのNPOによる協働事業として開始しました。

この取組の対象となる子どもたちの中でも生活保護を受けるような家庭では映画や演劇、音楽を鑑賞すること自体、非常にハードルが高いのですが、映画は世界を映し出す窓であり、多様な価値観を示してくれます。映画を通じた学びは自由で創造的で、映画を見ることは探究心や感性、生きる楽しさを育む学びとしてぴったりなんじゃないか、映画館という場所で、映画を見ながら語り合える安心できる居場所・機会を作りたいと考え、この取り組みを始めました。



上田映劇館内



うえだこどもシネマクラブ ウェブサイトトップページ

具体的には、月に2回上映会を行い、ワークショップなども実施しています。鑑賞料金は補助金を充当しているため無料です。お茶を飲みながら映画の話をしたり、映画を見ないときでも誰かが話を聞いてくれる、弱音を吐ける場所としてコミュニティカフェも合わせて運営しています。また、上映会のない日も週2日、子どもたちを受け入れていて、映画館の仕事をお手伝いしてもらったりしています。小学生から大学生まで、幅広い年齢層の子どもたちが来ていますが、中学生年代の子どもたちが多くなってきています。保護者や付き添いの大人も含めると1回の上映会に20~30人の集客があります。

最近では地域の大学の英語の先生がここで英語を教えてくれたりしています。母親との関係に苦労していた子どもが母親と一緒に上映会に参加して、お母さんが上田映劇の会員になって、ふたりで頻りに映画を見に来るようになって関係が改善したということもあり、学校関係者の理解が進んで映画館に来ることで出席扱いになる、いわゆる「映画館登校」が認められるようになったりと、効果が少しずつ感じられるようになりました。

K2

シモキタ
エキマエ
シネマ

シモキタ-エキマエ-シネマ K2(東京都世田谷区) | 北原豪

2022年1月、開館。

「シモキタ-エキマエ-シネマ K2」は、2022年1月20日にオープンしました。「街の入り口に、街の文化の共有地。」というコンセプトを掲げてやっています。運営母体は「Incline(インクライン)」という5つの会社による有限責任事業組合です。インクラインは「文化のDXを行える唯一無二の集団」として、アートキーワードにテクノロジーをベースに様々な活動をやる会社が集まっています。映画の製作では黒沢清監督の『スパイの妻』、配給では濱口竜介監督の『偶然と想像』に関わっていますし、コロナ禍のミニシアターを支援するクラウドファンディング「ミニシアター・エイド基金」はインクラインの高大健志、岡本英之、高田聡が立ち上げから運営に関わり、「Motion Gallery」をプラットフォームとして使っています。インクラインは作品づくりだけではなく、土壌となる環境づくりにも取り組んできました。

小田急線「東北沢駅」~「世田谷代田駅」の地下化に伴い、全長約1.7kmの線路跡地を開発して生まれる新しい「街」「下北線路街」のプロジェクトが立ち上がり、ここに新しく映画館をつくれなかと高大に相談が舞い込んだことから「K2」の企画が始まりました。

「シモキタ-エキマエ-シネマ K2」は、下北沢という文化の”るつぼ”のような街を背景に、様々な文化と接合し、時代を超える価値を街にひらいていく映画館です。」と、演劇や音楽、いろいろなサブカルチャーが根付いている下北沢というまちの魅力、それを背景にそのハブとなるような場所、そこで何かが生まれるような場所としてのミニシアターをつくりたいと考えています。

K2は、M(micro complex)・C(common)・U(universal)、MCUをビジョンとして掲げ、街に寄り添い、街の共有地=コモンズとなり、消費者ではなく当事者を増やし、多種多様な文化が好きな人たちが集う結節点となることを目指しています。そこに必要な「質の高いコミュニケーション」を生むため、K2は「学びを共有する場所」となり、文化アプローチのまちづくりにも貢献し、それらを体現することで、映画の持つ魅力・力が再認識されることを目指しています。

具体的なアクションとしては、以下のようなことを考えています。

- 番組編成を、地域住民や演劇・音楽といった下北沢という街に根付いたカルチャーと積極的にコラボレーションし、消費者ではなく当事者を生み出す。
- 地域の顔である街のお店の人々にスクリーンに登場していただく。(マナー動画)
- トレンドに左右されない価値ある作品を発掘・上映することを目指し、映画としての純度の高い普遍的な作品、国際性のある作品、ドキュメンタリーや音楽映画など多様性のある編成を行う。

- 「赤ちゃん同伴上映」「ファミリー上映」「英語字幕付き上映」など、映画館に行けない「不」を解消するような上映形態の実施。
- 雑誌(『MAKING』)の発刊をし、K2で上映する作品をベースに映画文化を通じた学びを提供する。
- 映画を通じた文化交流のためのカルチャーコミュニティをサブスクで提供する。
- オンラインスクリーンで特別上映プログラムを配信する。

文字にすると少し難しい感じですが、当事者を増やすという観点では、下北沢は小劇場がたくさんある演劇のまちでもあるので、演劇の方と絡んだ映画を上映したり、まちの「顔」である商店街の方々にマナー動画に出てもらうという企画に取り組んでいます。小劇場の館主さん、お菓子屋さんやバー、ライブハウスの店長等々、いろいろな人に登場してもらっています。

K2では、「不」を解消すること、バリアフリー、ユニバーサル上映にも取り組んでいきたいと考えています。下北沢は渋谷から15分ほどですが、住宅地でもあって住んでいる人が多い街でもあります。小さな子どもさん同伴で、ファミリーで来ていただける映画館にしたいし、東京には多くの外国人の方も住んでいるので英語字幕をつけた上映もやっていきます。

インクラインでは、BASICというオンラインコミュニティのプラットフォームも運営しているので、K2のオンラインコミュニティをつくることやK2で上映している映画に関連する映画をバーチャルスクリーンで上映するなど、立体的に映画を楽しんでいただけるような仕掛けをやっていきたいと考えています。

1月20日に始まったばかりで、まだご報告できることは少ないのですが、こけら落としの『偶然と想像』、濱口竜介監督特集にはとても多くの人に来ていただいています。これからも、いま考えている企画を少しずつ実現して、また皆さんにご報告できるよう頑張りたいと思っています



『偶然と想像』チラシ

Asian Film Joint (福岡県福岡市) | 三好剛平 (三声社)

2021年11月、映画資産を活用する新たなプロジェクト始動。

「アジアフォーカス・福岡国際映画祭」が2021年3月に終了を宣言しました。30年間続いてきた映画祭で、3152本、39ヶ国の作品を上映してきました。この映画祭が果たした最も重要な役割として、アジアのインディー映画を中心とした映画人等のネットワークがつくられたこと、福岡市総合図書館のフィルムアーカイブに多くのアジア映画が収蔵されたことの二つがあります。この二つの映画資産を活用して何か新しいことができないかと考えました。

私は、アジアフォーカス・福岡国際映画祭の関連企画として実施された「ネオシネマップ福岡」というアジア映画の商談会の共同ディレクターとして、2015年から企画・制作統括・運営を担当しました。そこで、映画は人と人とのつながりで作られていくことを実感しました。だからこそ30年かけて先人たちが積み上げてくれた資産を、しっかりと未来に繋げなければならないと思い、立ち上げたのが「Asian Film Joint」という企画です。

Asian Film Jointは、福岡とアジア諸国の間で、映画を通じて新たな交流や共同制作などのきっかけを作るプロジェクトであり、具体的には、映画人とのネットワークとフィルムアーカイブを活用して上映とフォーラムを行うことを考えました。予算としてはクリエイティブ福岡推進協議会、そして国際交流基金アジアセンターと国際文化財団の助成を活用し、一部は自己負担もして活動しています。

2021年11月に第1回目の企画として、才能豊かな女性監督、タイのアノチャ・スウィチャーゴーンポン監督の特集上映を行いました。彼女の作品はすでに国際的に高い評価を得ていますが、同時に彼女が立ち上げた東南アジアのインディー映画を対象にした助成プログラム「プリン・ピクチャーズ」で作られた作



アノチャ・スウィチャーゴーンポン特集

品群が軒並み国際的に評価されていることもあって、彼女とプリン・ピクチャーズの活動体が、今後のアジアの台風の目になるのではないかと考えて、アノーチャの特集を行うことにしました。

2021年に発表されたばかりの新作『カム・ヒア』と、彼女が脚本・製作を手がけた短編『レモングラス・ガール』の2本、そして彼女の旧作(『暗くなるまでには』2016、『ありふれた話』2009)の4作品を1週間、ミニシアター「KBC シネマ」で上映、併せて映画祭で育まれた人的なコミュニケーションを開いていくことを目的に、6つのフォーラムを実施しました。

フォーラムでは、「アノーチャ・スイッチャーゴーンボン監督入門」というテーマで夏目深雪さん、佐々木敦さん、吉岡憲彦さんにアノーチャの魅力を語っていただいたのをはじめ、福富渉さんとドンサロン・コーウィットワニッチャーさんに現在のインディー映画と社会情勢の関わりをお話しいただく回、それに「推し活」としての自主上映「東南アジア映画の現在地」「『暗くなるまでには』はどうしてこんなにすごいのか」「監督どうしの感想批評」といったテーマで、多彩な映画人にお話を伺いました。アノーチャ自身はもちろん、宮崎大祐監督、深田晃司監督といった監督にも参加していただきました。

劇場来場者数は一週間で253人(7日間)、オンラインフォーラムはYouTubeを使用して同時配信した後アーカイブを残し、たくさんの方々に視聴され大きな反響をいただきました。多くのメディアで取り上げられたことに加え、発信力のある方たちをフォーラムにお招きできたおかげで、SNSだけではなく各人の様々な媒体連載等でもご紹介をいただいたことから、非常に厚みのある展開にできました。

今後は、この特集をいろんな形に変えて全国巡回上映を目指したいと思います。また、フォーラムを通して、彼女にまつわる様々な言葉を拾うことができたのでそれをまとめたパンフレットを作り始めています。そして、この活動をきっかけに、ある配給会社さんからお声をいただき、今年のベルリン国際映画祭のインダストリー・スクリーニングにオンラインで参加できることになりました。ここで出会える新たな映画も、ぜひ次年度以降のAsian Film Jointの活動を通して紹介していけたらと思っています。また来年もご報告に上がれるように頑張ります。

グッチーズ・フリースクール | 降矢聡

ケリー・ライカート特集、全国ロードショー!

「グッチーズ・フリースクール」は、日本未公開映画の紹介やイベント上映、配給を手がける集団です。正確には僕個人を中心に、作品やイベントごとに関係者に声をかけて彼らとともに活動しています。昨年(2021年)、AFFの申請をするにあたって任意団体の登録を行いました。2014年から活動を開始し、2014~2016年に『アメリカン・スリープオーバー』『キングス・オブ・サマー』『ウェット・ホット・アメリカン・サマー』『ビヨンド・クルーレス』『スラッカー』等の日本未公開作品の上映を行い、以降、イベント上映を続けながら『タイニー・ファニチャー』、『クリシャ』などの配給も行ってきました。

コロナ後は、2021年2月にvimeoを使って配信で「本と音楽の映画祭 Home School Edition」を企画実施しました。この企画は「ステイホームで楽しめる、配信による映画祭!」というコピーの通り、YouTubeのライブ配信を利用して、配信する映画にゆかりのあるゲストを呼んでグッチーズが話を聞くというもので、『ワザリング・ハイツ ~ 嵐が丘~』『悪魔とダニエル・ジョンストン』『アザー・ミュージック』という3作品をオンデマンドで配信するとともに、かとうさおり(NINE STORIES)×磯上竜也(toi books)、『ワザリング・ハイツ』、福富優樹(Homecomings)×サヌキナオヤ(イラストレーター)、『悪魔とダニエル・ジョンストン』、松永良平(リズム&ペンシル)×山岡弘明(STEREO RECORDS)、『アザー・ミュージック』といった方々のトークを行い、ライブでもアーカイブでも配信しました。動画の合計視聴回数は800回となっていて、それなりに多くの方に見ていただくことができました。

「ケリー・ライカートの映画たち 漂流のアメリカ」というライカート監督の4本の作品を集めた特集を、シマフィルム・東映ビデオとの共同配給することになり、2021年7月には渋谷「シアター・イメージフォーラム」で上映を行い、その後、全国に巡回しています。

ライカートの作品は、2020年9月のイメージフォーラムフェスティバルで、グッチーズ・フリースクールの自主上映という形で3作品を上映し、その後、京都みなみ会館で『オールド・ジョイ』、出町座で『リバー・オブ・グラス』『ミクス・カットオフ』を上映、年末に下高井戸シネマで『ウェンディ&ルーシー』を加えた4作品を上映し、大変好評で上映を望む声も多く寄せられましたが、これ以上自主的に広げることは難しいと思っていたところ、東映ビデオとシマフィルムに興味を持っていただいて、三者での共同配給が実現、現在までに全国21館と2つの映画祭で上映していただくことができました。

2021年12月にはAFFの支援を受けて3つの映画イベントを開催しました。ひとつは京都みなみ会館で実施した「70-80年代名作映画鑑賞会」。70-80年代のアメリカ映画を6本(『ハズバンズ』『ウォーターメロンマン』『まだらキンセンカにあらわれるガンマ線の影響』『愛されちゃって、マフィア』『おかしな求婚』『ポパイ』)を上映しました。下高井戸シネマではメイズルス兄弟特集を行い、代表作の『セールスマン』とともに、『グレイ・ガーデンズ』と「肌蹴る光線」が権利を持っている『あの夏』を上映しました。12月21日、25日には「Merry Xmas! トム・ハンクス映画祭」を開催、80年代の『スブラッシュ』、90年代の『プリティ・リーグ』、00年代『ボーラー・エクスプレス』、10年代の『幸せへのまわり道』という4本のトム・ハンクス主演映画を、なかのZERO 視聴覚ホールを借りて上映しました。

これまでは、グッチーズの活動は貸ホールやイベントスペース等を借りて、広報や宣伝も仲間たちでやっていましたが、コロナ禍では配信のイベントが増え、感染対策がきちんしている映画館と組んで実施することが多くなりました。

2022年は、グッチーズで上映権を持っている『サポート・ザ・ガールズ』を映画館で上映できないかと頑張っているところです。また、vimeoで配信した『アザー・ミュージック』は関澤朗さんが個人的に配給権を取得されたので協力して何かできないかと考えています。『グレイ・ガーデンズ』の配給権も少し残っているので上映の機会をつくりたいと思いますし、京都みなみ会館で上映した「70-80年代名作映画鑑賞会」の上映を期待する声をいただいていますので、アンコール上映ができればいいと思っています。

グッチーズ・フリースクール 2021年に開催したイベント・上映スケジュール

2/20-23	「本と音楽の映画祭 Home School Edition」	vimeoを利用した配信イベント
2/27, 28	『グレイ・ガーデンズ』関連3作限定配信	vimeoを利用した配信イベント。「肌蹴る光線」さんとの共同企画
3/24	「基礎から学ぼう!労働問題とハラスメントに関する勉強会」	配信トークイベント。Filmgroundさんとの共同企画
4/17~	『クリシャ』ユーロスペースほかでロードショー	名古屋シネマテーク、京都みなみ会館、元町映画館、大阪シネ・ヌーヴォ、KBCシネマでも上映
7/17~	ケリー・ライカート特集上映全国ロードショー	シマフィルム、東映ビデオさんとの共同配給・配信
10/30	オンライン映画館APARTMENT by Bunkamura LE CINÉMAにて配信	LE CINÉMAさんとのコラボ企画
12/4-12/12	70-80年代アメリカに触れる! 名作映画鑑賞会	AFF対象事業
12/11-12/24	メイズルス兄弟特集	AFF対象事業。「肌蹴る光線」さんとの共同企画
12/21, 25	「Merry Xmas! トム・ハンクス映画祭」	AFF対象事業。「深海遊泳」さんとの共同企画



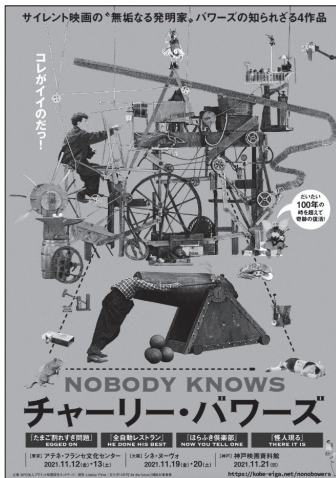
70-80年代名作映画鑑賞会 チラシ

特集上映「NOBODY KNOWS チャーリー・パワーズ」

田中範子 (NPO法人プラネット映画保存ネットワーク/ 神戸映画資料館)

2021年11月、特集上映「NOBODY KNOWS チャーリー・パワーズ」開催。

神戸映画資料館はフィルムアーカイブ活動と並行して、併設するミニシアターで週末を中心に上映会も行



チャーリー・パワーズ特集 チラシ

っています。昨年(2021年)は、文化庁のAFFに申請し、1月から12月までの1年間に実施する自主事業の中で助成条件を満たす企画を全て折り込み、その取り組み数は13件に上りました。企画のほとんどは神戸映画資料館で開催するものでしたが、「チャーリー・パワーズ特集」は東京、大阪、神戸の3都市で実施しました。

チャーリー・パワーズの『たまご割れすぎ問題』『全自動レストラン』『ほらふき倶楽部』『怪人現る』という4つの短篇(サイレント)のデジタル素材を入手し、上映権を取得して、1パッケージとして字幕を作成し、オリジナルの音楽をつけて、3つの会場で上映しました。作品は全て1920年代後半に造られたもので実写のスラップスティックとストップモーションアニメーションを融合させたものです。

チャーリー・パワーズは長く忘れられた存在でしたが、1960年代にフランスで発見され、これを皮切りに世界各地で眠っていたフィルムが発掘され、21世紀に入って現存する作品のデジタル修復が行われ、映画史に埋もれていた天才の再評価が進みつつあります。

「ファンタジックがひっくり返って時々背筋に怖さも感じるほど」「パワーズの映画はストーリーは整合性取れてないが、シュールさで圧倒する分赤塚不二夫の天才バカボンのアナーキズムに似たものがある」といった感想が上映会の後に寄せられました。本当にシュールでクレイジーな作品で、1920年代の映画とは信じられないような面白さです。

無声映画のため伴奏音楽をつけたのですが、オーソドックスな伴奏より現代的な音楽をつけたほうが作品の魅力を引き出せると考えて、『スパイの妻』のロケ地にもなっている神戸の旧グッゲンハイム邸で活躍している塩屋楽団とサイレント映画のピアニストで第一人者の柳下美恵さん(Solla名義)とのコラボレーションで音を作りました。録音も旧グッゲンハイム邸で行いました。

当初は生伴奏をつけて上映することを考えていて、コロナの感染状況によって生演奏が困難になることも考え、その保険として録音音源を作っておくという計画でしたが、音作りのためにセッションをするなかでかなり面白い音が作られ、これを生演奏で再現するのは難しいと判断し、生伴奏でツアーを行うことは中止して音源の作成に注力しました。今回演奏家と一緒に音作りをやってみて、生で即興的に伴奏をつけることと収録することは全く違うということがわかりました。特に今回はオーソドックスなものではない音を目指したのでなおさらその違いが明確になり、試行錯誤の結果、パワーズの作品を現代に蘇らせるためにふさわしい音を作ることができたと思います。

東京ではアテネフランセ文化センターを会場に、金曜日と土曜日の2回上映、金曜日は細馬宏通さんのトーク付きで、事前に予約で満席となり、土曜日とても多くの来場者があり、若い観客が期待以上に多かったことにも非常に手応えを感じました。大阪も金曜と土曜日の2回上映、神戸は1日2回上映、地元ということで塩屋楽団にもトークに参加していただきました。東京、大阪、神戸の上映は大きな手応えがありました。2022年には東京を皮切りに全国のミニシアターで公開したいと考えています。

SAVE the CINEMA [STC] | 西原孝至 (映画監督)

「SAVE the CINEMA」は、コロナ禍で苦境にあるミニシアターを守ることを目的に、2020年4月に活動を始めました。昨年(2021)は1月早々に緊急事態宣言が発令され、東京では1000平米以上の大規模な映画館は休業要請の対象となりました。他方、1000平米以下の映画館に対しては協力依頼の働きかけは行われましたが「要請」ではなかったため、時短営業や客席数を制限し、感染拡大の防止に協力しても協力金は支給されない状況となりました。それに対してアクションを起こそうと、メンバー内でも議論はありましたが、4月に「#ミニシアターにも協力金を」というプラカードをもって国会議事堂前でサイレントスタンディングを行い、「#文化芸術は生きるために必要だ」とツイッターデモの呼びかけを行うなど世論喚起に努めてきました。

4月にまた緊急事態宣言が発令された際には、演劇や音楽については5000名以下のイベントは開催可

とされたのに、映画館(1000平米以上)とプラネタリウム等には休業要請が出されるという奇妙な事態が起きました。これについては、当時の萩生田文科大臣も理由が説明できず、経産省や東京都からも明確な理由が示されることはありませんでした。朝日新聞にユーロスペースの北條誠人さんが語った「1日2万円の協力金は香典のつもりか」という言葉がツイッターのトレンド入りして話題になりました。ミニシアターに対しては休業要請はありませんでしたが、STCでは「#映画館への休業要請に抗議します」を掲げて、都庁前や大阪府庁前でサイレントスタンディングやツイッターデモを行い、ニュースにも取り上げていただきました。

そうしていくうちに、日本映画製作者連盟(映連)や全国興行生活衛生同業組合連合会(全興連)もこの動きに共鳴するような形で「#NO MORE 映画館休業」が掲げられ、全興連や映連からメッセージが出されました。STCもこれに同調してツイッターデモ呼びかけ、全興連の佐々木伸一会長と一緒に都庁に要請に行ったりもしました。いろんなところから声があがった結果、6月以降は緊急事態宣言下でも、客席の50%という制限付きで、すべての映画館の営業再開が認められることとなり、5月末に映連、全興連、都興組(東京都興行生活衛生同業組合)とSAVE the CINEMAの連名で「緊急事態宣言及び緊急事態措置の変更に対する声明」を出すこととなりました。

ミニシアターを支援するために始まった小さな活動が、大手の映画会社やシネコンともつながることになったのは、嬉しい驚きでした。2021年12月1日の「映画の日」の中央式典では映画産業団体連合会(映団連)から感謝状をいただくこととなりました。これからも、このようなシネコンやミニシアターの垣根を超えたつながりを大事にしていきたいと思っています。

コミュニティシネマセンターと全国の7つの映画館・コミュニティシネマが文化庁のARTS for the future!を活用して共同で実施した子どもたちを対象とした企画「夏休みの映画館」にSTCも協力しました。

STCでは、今後も、上映者やミニシアターへの恒常的な公的支援制度の確立を目標に掲げて活動を続けていきます。ミニシアターは公立であろうと民間のものであろうと、地域の公共財であり、公共的な場であると考えています。この公共的な場は、これまでは多くの場合、自助努力だけで守られてきましたが、これからは官民一体となって守っていくことが必要だと考えています。

短期的には、まずは長期化するコロナ禍の影響を乗り越え存続するために、文化庁による支援事業「ARTS for the future!」の継続(2025年度まで)を求めていきます。これはミニシアターだけの問題ではないので演劇や音楽関係の皆さん(#WeNeedCulture)とも連携して、省庁や政党に直接声を届けるロビーイング、SNS等で世論を喚起する活動を継続します。

中・長期的には、上映者やミニシアターへの恒常的な公的支援制度の確立を目指して、まずは、「劇場法」や「芸文振法」といった法律をどのように改正すればそれが可能になるのかといったことを考える勉強会を、文化芸術振興議連や省庁等とともに実施したいと思っています。また、上映者自身の公的支援の重要性に対する認識を深め、社会的な気運を醸成することも重要です。例えば次回のコミュニティシネマ会議で何らかの宣言・声明を出し、作り手や映画ファン、社会を巻き込んでムーブメントを作ることも大切だとメンバー内で話しています。

Mini Theater Park ミニシアター・パーク | 渡辺真起子(俳優)

ミニシアター・パークは2020年から始めた活動ですが、去年は、映画館の収入の助けになればという思いから、マスク・マスクケース・ステッカーに続き、オリジナルTシャツを製作して映画館で販売していただき、その販売利益を映画館の収入にさせていただきました。全国63館の映画館からご依頼をいただき、合計2265枚を卸させていただきました。原価だけをいただき、映画館では半袖は3300円、長袖のTシャツは4400円で販売していただきました。どれくらいお力になれたのかはわかりませんが、ご好評いただいたと

いう感覚もあります。

映画製作も徐々に増えていて、俳優たちは現場で良い作品を作って皆さんに見ていただく努力をするのが大事な仕事で、だんだん忙しくなっています。

先ほど、SAVE the CINEMAの西原さんの話にもありましたが、「夏休みの映画館」に井浦新さんと私、斎藤工さんが参加したり、「こども映画教室」のミニシアターツアーに、井浦さんや私が参加して、美波さん(深谷シネマ)や中村優子さん(福井メトロ劇場)も地元や出身地の映画館からよんでもらって、吹き替えのワークショップに参加したりという活動も行いました。子どもたちと一緒に体験するワークショップには他の俳優からも参加してみたいという声が届いています。各地の映画館で「こども映画教室」のようなイベントがありましたらお声がけください。オンラインでの登壇も以前に比べると容易にできるようになり、映画館と俳優たちが直接出会える機会も増えたように思います。

ミニシアター・パークは、これからも何かできることを、できるときに、探したり作ったりするという活動を継続すればいいのかなと思っています。いまでも、オミクロン株の感染が拡大していますが、負けずに頑張っていきたいなと思います。